

司馬遷著「史記列伝」より。「老子韓非子伝」改訳増補

() はすべて木下の補足。

会話以外の「」は原文。

老子は楚その国苦原厲こげんろい郷曲仁里きょうきょくじんりの人である。名は耳じ、字は聃だん、姓を李氏りしといった。周の国の守蔵室(書庫)の役人をしていた。孔子が周へ行き、礼について老子に教えを乞うた。老子が答えた、「あなたが問題にしている礼は、それを実践した人は皆すでに死んで骨も朽ちている。ただその言葉が遺っているだけだ。人間は、時を得れば成功して高い位に就くこともできるし、時を得ることが出来なければ雑草のように朽ちて行くものである。商売を心得た商人は、持っている品を全部並べたりはしない、人格の優れた人は、見かけは愚かな者のように振舞う、と昔から言うのではないか。あなたの「驕気」(人より優れているという思い、自尊心)と「多欲」(立派な仕事をうんとしたいという野心)、「態色」(良い格好をしたいという欲望)、「淫志」(助平根性)を捨てることだ。これがあなたの人生の邪魔をしている。私があなたに言えることは、これだけだ」と。孔子は老子と別れた後、弟子に言った、「鳥は空を自由に飛び、魚は水のなかを泳ぎ、獣けものは人間より速く走る。そのことを心得ていれば、走る者には網を張り、泳ぐ者には釣り糸を垂れ、飛ぶ者には矢で射て捕える術を使うことが出来る。しかし、龍と来たら、風雲に乗って天に上ると言うのだから、捕まえようがない。今日、老子に会ってきたが、あの人はじつにに龍のようだった」と。

老子は「道タオ」と「徳」(万物の生成の原理とその働き「道タオ」、およびその働かせ方「徳」)を修めた人だった。その「学(身につけたところ)」「は、みずからは隠れ、名無きを以て、務めとすること(「以自隠無名為務」)にあった。長く周の国に務めていたが、周が衰微し乱れて行くのを見て、周を去る決心をした。関所(函谷関)に差しかかった時、関所の役人の尹が老子を見つけ「あなたは隠遁されるのですね。この機会にどうか一筆書いていただけませんか」と頼んだ。そこで老子は、筆を執り、上下二篇の書、道徳の意を述べることに、五千余言の書を著わし、去って行った。その後老子がどこに行ったか、誰も知らない。

別の言い伝えでは、楚の国に老萊子ろうらいしという人がいた。彼には十五篇の著書があつて、道家の説を述べている。孔子と同時代の人と言われている。あるいは、老子について、百六十歳まで生きたという人もいるし、いや二百何歳だという人もいる。その道を修めれば、長壽を全うするものだ。孔子が亡くなってから百二十九年後(戦国時代)に書かれた書に、周の国に太史儋たいしたんという人が居て、秦の献公けんこうに見えて、こう言ったという「もともと秦と周は同盟を結んでいたが五百年後に敵対関係に入り、七十年後、それを統一する霸王はおうが現われる」と。この儋たんが老子だと言う者もいる。それは間違いだと言う人もいる。どれが本当か、知りよう

がない。老子は隱者（「隱君子」）である。また、老子に子があつたとも言われ、名は宗。宗は魏の国の將軍になり、段干という土地をもらつた（封ぜられた）。宗の子は注。注の子は宮。宮の玄孫（孫の孫、曾孫の子）は假と言つた。假は漢の孝文帝に仕えた。そして假の子である解は膠西王印の太傅（左大臣太政大臣）になつて、斉の地に住んだ。世の人、老子を学ぶ者は儒学を斥け、儒学もまた老子を排斥する。「道が異なるとお互いに相手のためになることはしないものだ（「道不同不相為謀」）と言われてはいるが、まさにこのことだろう。

莊子は蒙の国の人である。名は周と言つた。以前蒙の国の漆園の役人だつた。梁の国の惠王、斉の国の宣王の時代である。その学識の広いこと他に比べる者はいない。しかし、要になる考え方は老子に基づいていた。その著書は十数万字になる。書かれているのは「寓言」（喩え話）である。「漁父」「盜跖」「胠篋」などの書名で、孔子の弟子たちを批難し、老子の教えを解説して見せた。畏累山の麓に住んでいた亢桑子のことなど作り話（空語）で「事實」ではない。とはいえ、為す書文辞奔放にして事態を捉え、実情を納得させ、儒家や墨家を論難した。当時のよほどの老練の学者も、彼の論鋒を破ることは出来なかつた。その言は広く深く（「洗洋」）自在に言い放つて自分の説を展開した。だから、王侯高官が自分の方から彼を召抱えようなどと言うことも出来なかつた。楚の威王は莊子の噂を聞き、使者を送り、高額の金と品々を差し出して仕官させようとした。莊子はそれを見て、高笑いして言った、「お金は有難いものだし、大臣の位も得難いものだ。しかし、お主、あの郊祭に生贄にされる牛のことは知っているだろう。何年間かちやほや大事にされ、立派な縫取模様の衣を着せられて、祭場に連れて行かれ、そのときになって、誰にもかまってもらえなかつた豚のほうがよくつたと気づいても、もう手遅れだ。さつさとこんなものは持つて帰つて、私を汚れさせるのはやめてもらおう。私はむしろ汚い泥のなかで遊んでいる方を喜ぶ。国を有つものたちに縛られてなにも出来ないより、一生誰にもへこへこせず生きる方が私の志に合っている」と。

申不害は京の人である。京は、以前鄭の国の封土で、その身分の低い役人だつた。学問を積み（法術を学び）、韓の国の昭侯に自薦した。昭侯は大臣に取り立てた。不害は内政の教化に尽力し、国外の諸侯に適切に対応して、手腕を發揮。十五年その地位にあつた。申不害が亡くなるまで、韓の国は乱れることなく、侵害されることもなかつた。申不害の学問は黄老を本とし、「刑名」（法家）を柱とした。著書一篇あり、書名は『申不害』である。

韓非は、韓の国の貴族の出である。刑名法術の学を称えたが、帰するところは黄老である。韓非は生まれつき口吃で、演説は出来なかつた。しかし、筆は立つた。李斯は韓非には敵わ

ないと思っていた。韓非は、韓の国が外敵に押されていくのを見兼ねて、なんども書面で韓王に諫言した。韓王はそれを取り上げなかった。韓非は「国を治めるということは、法律制度を確立させ、王自身がその力を持って臣下を統率し、国を富ませ強い兵力を備え（「富国強兵」）政策の実現のために「賢人」を政治に参加させなければならぬ。「浮淫」の輩を大事にして、功績を上げている者を評価しない現在の王の政事は間違っている、儒者は「文」章を弄ぶだけで、実際には法を乱している。血気盛んな漢（「俠者」）はみだりに「武器」を執って国の定めを犯している。国が落ち着いている時は、高名な人物を大事にしておくのもかまうまい。危急の時には武装した兵を動かさなければならぬのである。いまは、高名な人物には用がない」と訴えたのである。まっすぐ（「廉直」）な人が心の曲がった大臣どものために生かされていないことを悲しみ、歴史上の君主がどんなふうにも政を執ってきたかを洞察して述べた。著書名「孤憤」「五蠹」「内外儲」「説林」「説難」など、十万余言に及ぶ。韓非は、王を説き伏せることの難しさをつくづく悟り、「説難」という書を著して、細かくこの問題を論じた。そして、秦の国で死んでしまい、彼自身が説いたこの「難しさ」から逃れることが出来なかった。

（「説難」の引用文は省略）

韓非子の著書を秦に持って行った人がいた。秦王は「孤憤」「五蠹」を読んで、「ああ、私はこの人と会って話をする事が出来たら、死んでも思い遣すことはないだろう」と言った。李斯は「これは韓非という者が著したものです」と伝えると、急に韓を攻めることにした。驚いた韓王は、韓非を使者として秦に送った。秦王は喜んだが、すぐに韓非の言うことを用いるまではしなかった。李斯と姚賈子は韓非子を妬みこう言った、「韓非は韓の国の貴族の一族です。いま、王が諸国を併合しようとしておられるとき、韓非の言は結局は韓の国のことを慮っていることになるでしょう。それが人情というものでしょう。それは、秦のためにはなりません。いま、王は韓非を重く用いるのでなくしばらく秦の国に留めてあとで帰すのは、ご自分で災いの種を播くようなものです。なんでも法律を建前に使って韓非を殺めた方が得策です（「不如以過法誅之」）」と訴えた。秦王はなるほどと思い、警吏を韓非のところへやって取り調べさせた。李斯は獄にいる韓非に毒をやって、自殺させようとした。韓非は自分から秦王に会って弁明したいと思ったが、王に会うことが出来なかった。秦王は、後になって、この処置は間違っていると気づき、人を遣わせたが、韓非はすでに死んでいた。

申不害、韓非子、みんな著書を遺し、後世に伝わっている。学者はたくさんいていろんなことを言っているが、私は独り、韓非子の「説難」を書き起し、子自身がその難を逃れられ

なかったことを悲しむ。

以上、太子公司馬遷、老、莊、申、韓非の伝を綴り、思うに、老子が尊ぶ「道」は「虚無」にして状況に応じて対応（「因応」）し「無為」に「変化」する。だから、老子の言葉は微妙にして、理解するのが難しいと言われてきている。莊子は「道」と「徳」を解き放ち（「散じ」）、拡大解釈して自在に議論（「放論」）している。大切な点は、自然に帰る（「要亦帰之自然」）ということだ。要はまたこれを自然に帰す韓非子は法則を定め、実情を一つ一つ問い、法に当てはめ、是非を明らかにした。その結果議論は深刻になり、思いやりに欠けている。これらがみな「道」と「徳」の説に原づいてのことだ。それにしても、老子はじつに深遠であることかな。

『史記』は中国最初の正史。司馬遷著。黄帝から前漢武帝までの通史。
紀伝体で書かれ、本紀十三卷、世家三十卷、表十卷、書八卷、
列伝七十卷から成る。

司馬遷（一四八B.C中元五年？～八六B.C始元一年）夏陽陝西省韓城県の人。
二十歳のころから、父司馬談の命を受け諸国を旅し、古記録を収集。
元封三年（一〇八B.C）父の跡を継いで太史令になり「太史公」と呼ばれる。
天漢二年（九九B.C）、匈奴の捕虜となった李陵を擁護して武帝の怒りに触れ、下獄。宮刑に処せられる。二年後大赦。中書令となり、父の遺命で着手していた修史の仕事に没頭。『史記』を書き上げた（九一B.C）。『史記』は「太史公書」とも呼ばれている。